



## 生命から湧き出るものを規定するのは 生命自体であり、その全局の組織である。

新しい酒はすべからく新しい皮袋に盛らなければならない。新しい皮袋とは新しい言語であり、新しい指導原理の謂である。宿業の穢される事のない恒常に新しい言語、新しい指導原理を何に求め、何処に発見したらよいか。人類は言語を創造する能力を先天的に所持している。刹那々に生まれる知情意にひらめきをそのまま言語音声として表現する。且つそのひらめきの種々相の音を組織して生命の智慧の言葉の原理を構成する。その言葉の組織と原理の構造がエデンの園である。そして更に此の始原の言語の組織に基づいて其処から様々な概念や思想を産んで行くのである。

すなわち人間はこの本具先天の造語能力を用いて、刹那々に感応する事物の主体客体を万物の実相として表現し、且つまた自己並に世界の行動の指針を樹立するのである。此の造語能力の実体と本質と、並にそ

の言語の始原の組織と、及びその活用法を称して布斗麻邇と云う。

本具共通の言語を「神の口より出づる言葉」（レビ記）と云う。事物の本体本質を捕えた仏陀の正覚の正体である「言辞の相」（方便品）と云う。永遠に新らしく、刹那毎に醸し出される生命の美酒であり、天の真奈井からきらめいて湧き出て来る珠玉の如き智慧の真清水である。そこには常に鮮らしい生命の躍動があるのみで、宿業の穢れの尾を曳くことがない。常に今日只今であり、何時も此処に在り、即ち「中今」に生きている。この生命の躍動にこそ人間精神の存在と発現の根底であり究極である。そして此の躍動の自己表現である「生命の樹の葉」と云われる単純素朴な始原の言語こそ、精神的たと科学的たとを問わず、人間が営むすべての文明の内面的な淵言であり原律である。

生命の新しい酒は、斯の如くにして刹那毎に耐えず創られている。そして且つその御酒がみずから盛られるべき清浄な皮袋もまたその御酒自身によって構成される「生命の樹の葉の道」すなわち「生命の言葉の道」「言葉の誠の道」「敷島の道」として生命自体が生命の言葉自体を以てこれを規定し構成する。すなわち生命から湧き出るものを規定するものはまた生命自体であり、その全局の組織である。この故に生命の新酒を盛るべきその皮袋、すなわち生命の心の衣である規範もまた同じく永劫に新らしく、清浄にして金剛堅固である。生命の衣は先天から直接に湧き出た摩邇を組織したものであって、それは概念でも思想でもなく、理論でさえもない。故に色情がこれを汚す余地がなく、概念がこれにとりつく隙がなく、宿業がこれに泥みこれを犯す余地がない。

（つづく）